ソモト・エモーショナル・リコール＆リリース』
関連資料（３）

引用・出典
◆ソモト・エモーショナルリリース 体性・感情・解放とその向こう
ジョン・Ｅ．アプレジャー（著）３４～５７頁

２．

エネルギー嚢と
ソマト・エモーショナル
リリース
最新版1990年

III. 木のモデル

二つのモデルの最初は、頭蓋仙骨治療を根とし、S.E.R.の過程を木の幹とする、というものだ。頭蓋仙骨治療概念が頭蓋や、仙骨と尾骨；縫合とその内容；脳脊髄膜システム、特に硬膜；脳の脳室システム；脈絡膜システム；くも膜と静脈洞システム；脳脊髄液システム；圧力一定のモデルで述べられたメカニズム；という構造と機能にしっかりと根をおろしているように、頭蓋仙骨治療も地中にしっかりと根をおろしている。全身診断と、促進分節の診断と治療におけるテクニックは、根のシステムの情報を蓄えた節として考えることができる。

この根が集まり、S.E.R.となるところの幹を形作るわけだ。この幹は二方向導管として水や栄養素を根から枝や葉に運び、光合成の糖としてのエネルギーを葉から根へと運ぶ。このS.E.R.の幹から出た主な枝は、治療イメージや治療対話、心と体/体と心の統合、自己の気づき、自己清浄、チャネリング、霊的成長、幽体離脱、再世体験、などを含む。(このモデルでは)エネルギー嚢は幹(S.E.R.)の成分と考えられる。ということは、自然が辿る経路をたどるなら、エネルギー嚢をリリースするということは、今、直ぐにということでなくても、結局はS.E.R.につながっていくもので、それは一体となった患者・介助者(セラピスト)の複合体を、空を見上げるほどの枝へと導いていくものだ。この最も高い枝や葉の産出したものは、幹(S.E.R.)を通って根(頭蓋仙骨治療 C.S.T.)へと帰っていく。

このモデルでは、根(頭蓋仙骨治療)、幹(S.E.R.)、すべての枝や、葉(S.E.R.から伸びていく多数の枝のリストは上記されている)間の相互依存ははっきりしていて、反ばくできないものだ。C.S.T.の根なしにS.E.R.の幹は存在しないだろう。このS.E.R.の幹が、いろんなサイズや、いろんな形の枝として表されている、容易かつ治癒方法として最も高まったものへ、と我々を導いてくれたのだ。

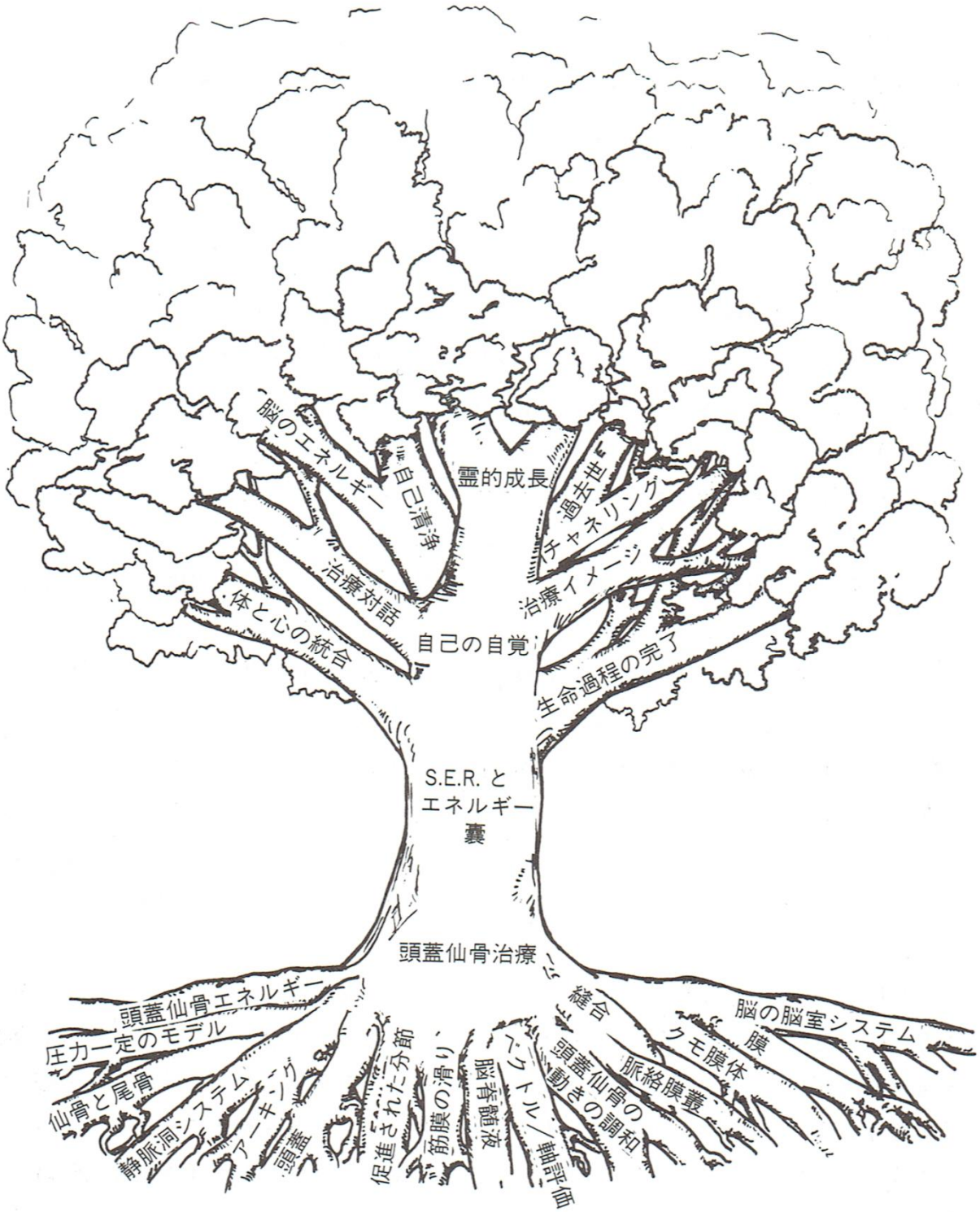


図 II － 3

この木のモデルでは、頭蓋仙骨セラピストが用いる他の治療様式に関連して S.E.R.がどう交叉し、つながって機能しているかを示している

IV. 脳発電機モデル

二番目の類推というかモデルも打ち消し難いもので、それは脳を、非常に精密、かつ異なった多数のエネルギーを作り出す創造者/発電機と見なし、体の各部分がそれぞれに共鳴する、というものだ。

この共鳴する体の部分というのは、内臓からイオンに至るまですべてのものを含む。すべての組織から液、分子をも含むものだ。それぞれの頭外(脳の外部)部分は、脳から送られた特定のエネルギーに反応し共鳴しだすと、「脳のメッセージは受け取られ、そのように行動に移された」ことを知らせるメッセージを今度は脳に対して送り返す。

脳からのメッセージは、バクテリアが侵入したので白血球に攻撃体制につくように、というものかもしれないし、あるいは肝臓に対して、脂肪溶解毒素を一掃するために胆汁を生産するように、というメッセージでもありうる。また、毒ヘビに噛まれた部分から毒素が広がらないよう血管を収縮するように、というものかもしれない。神経とホルモンは末端内臓に情報を提供し、情報を得ていることは誰でも知っている。が、日常起こる沢山の出来事を、ただ神経と血管から生まれたメッセージという考えかたのみを使って説明できうるものではない。だから脳は特定のエネルギーを創造することができ、それによって体の特定の部分がそれぞれのやり方で共鳴するようになる、という考えを考慮にいれてもいいのじゃないだろうか。こう考えると自律的にしろ外部からきたものにしろ、ヒーリング・エネルギーの使用を説明できる。また介助者として、患者の自己ヒーリング機構をどういうふうに促進できるかを説明することになるかもしれない。

そうだとすれば頭蓋仙骨治療の仕事は、脳の機能を促進させ、脳が機能しているこの内的環境を改善するという可能性を秘めているという事についてちょっと考えてみよう。この観点からみてみると頭蓋仙骨治療が、流感から癌、過運動症から内因性欝病にいたるどんな病気にしろ、その病気と闘っている患者をサポートすることができるといっても完全に差し支えないことになる。頭蓋仙骨治療は脳を活性化させるといってもいいだろう。活性化することによって、脳がより的確で、詳細に渡り正確で、パワフルなエネルギー・メッセージを、より適切かつ効果的に送ることができるのかもしれない。

脳から送られたエネルギーのメッセージを受入れ、共鳴している頭外(脳の外)体成分は、どのような程度にしろ(ほんの僅かなものから完全なものまで)つねに機能障害にさらされるだろう。どんなものであろうと、脳が送ったエネルギー・メッセージを妨害したり歪めたりするようなものが存在すれば、機能不全の原因になりうる。あるいは体成分がメッセージを共鳴したり受け取ったと確認する能力を損なうものなら、どんなものでもその原因になりうる。エネルギー嚢は、どうもこういった妨害の原因となりうるようなのだ。それはこのフィードバック環のどこにでもできる可能性がある。

脳から周辺体成分へ送られる途上でエネルギー嚢にぶつかると、エネルギー・メッセージは歪んだり悪くすると抹消されたりする恐れがある。エネルギー・メッセージが歪むということは、送られる予定になっていた体成分にメッセージが届かない、ということを意味したり、あるいは体成分が不正確なメッセージに反応してしまうということを意味することにもなる。この反応によって、その体成分が、トータルな体機能の調和を乱すような何かをしかねないことにもなる。それは、白血病や免疫抗体障害などに見られるような、自己破壊を起こすプロセスの要因ともなりかねない。

エネルギー嚢は、また、送られる予定になっている頭外体成分の共鳴器にできるかもしれない。この位置にできたとき、エネルギー嚢はその成分が正しく共鳴する能力の邪魔をしたり、まったく妨害してしまうことにもなる。また、(脳から)メッセージは送られてきた、というメッセージを脳に返せなくなるかもしれない。脳は、体成分が最初のエネルギー・メッセージに応じたということに気づかずに、同じメッセージを送り続けるかもしれない。共鳴に応じた頭外体成分は、望まれるレベルを越えて反応し続けるかもしれず、その結果、内臓や反応機構の過敏反応、消耗を招くかもしれないのだ。共鳴に応じた体成分から送られたエネルギー・メッセージを傍受し、変化し、あるいは無効にしたエネルギー嚢は、また過敏反応を起こす原因ともなりうる。いうまでもなく、脳の中にできたエネルギー嚢が、システム全てを機能障害におとしいれることは確かだ。

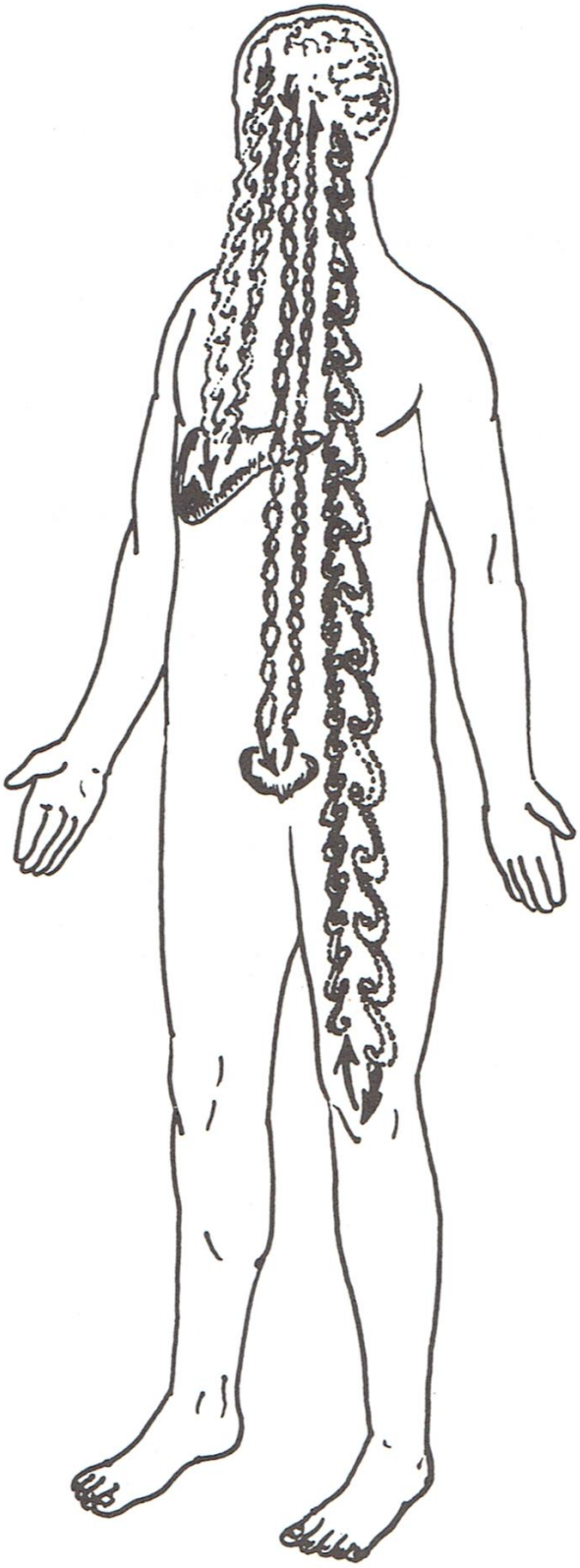
このモデルで提唱されたようなシステム内での干渉は、カルニ博士と私が最初に考えたように(外部からの外傷によって起こされた)エネルギー嚢によっても起こりうるし、あるいは感情やバクテリア、ウィルス、毒素、電磁器公害、放射能などに起因してエントロピー(熱力学で物質の無秩序性を示す量)が増大した(エネルギー段階での混乱)局部によって生じるエネルギー嚢とよべるものによっても起こりうるものだ。どのような機構にしろ、エネルギーが混乱した場所では、なるほど脳創造／発生機と、頭外体成分共鳴器の間に存在するとても繊細なエネルギー環のスムーズな流れを損なうことが起こりうる。

エネルギー嚢のリリースとソマト・エモーショナル・リリースは、体をきれいにし、このシステムの破壊に結びつくような、外来エネルギーの直接エネルギー場や、妨害をクリアーにするのに役立つ。ベクトル／軸の調整と統合やチャクラをオープンにすることも、このモデルでは明らかに意義あるアプローチとなっている。私はこのモデルをS.E.R.の木の幹から出たもう一つの枝だと見なしている。[13,14]

---

13. これを書いてから“脳の暗い側面”The dark side of the Brainという本を読む機会を得た。著者のハリー・オールドフィルドとロジャー・コーギルは、上に記した私のモデルと似た理論を詳しく説明している。一読に値する本だ。英国のエレメント・ブックス出版社から出ている。

14. 研究物理学者のニール・モホンとの会話で、彼はこのモデルで記されたシステムを、模型飛行機や船から、果てはNASAで使用されている宇宙船・発射をコントロールするリモート・コントロール・システムと結びつけた。



図Ⅱ－4

脳から発したシグナルが頭外体部分へ伝わり、それぞれの体部分で受け止められる。受け取りが承認された。すべてのコミニュケーションはエネルギー波シグナルによる。神経と分子によるコミニュケーションに付加するものだ。テキスト参照。

V. S.E.R.の開始

治療介助者としての仕事をすればするほど、心の方向の持つパワーに気づかずにはいられない。私が頻繁に使うこの心の方向とは、その時点で患者の内的知恵[15]がしたいと思うどのようなものをも支持する、という自分の心の持ち方なのだ。だから私の最初の心持ちとしては、患者がしたいことをしてくれて結構だ、ということを患者に知らせることにある。それは無言のうちに、最初のタッチを通して伝えられる。患者とはいろんなことを話すだろう。口ではあることをしゃべっていても、タッチではまったく違うコミニュケーションをしているかもしれない。患者の中の意識の気づきと非意識との統合が進んでいくにつれて、とても優しく感覚を研ぎ澄ませて、このセッションが始まってからタッチでコミニュケートしてきたことがらを言葉に出して話し出そう。

今いったことは、実際のセッションではこうなる。私の手を置くときに“もし私に頭蓋仙骨治療をして欲しければ、そうしましょう。どこから始めればよいかを示してくれますか。エネルギー嚢がどこかにあって、緊急に何とかしたければ、それに取りかかりましょう。どこに手を置けばよいかを示してください。もしソマト・エモーショナル・リリースをしたければ、始めて下さい。私はついて行きますから。さあ、自分がしたいことを想像しなさい。想像したことを私にも伝えてください。そのイメージの持つ意味を解き明かす手伝いをできるかもしれません。対話をしたいときはいつでも結構です。準備ができたときは知らせてください。この問題に対してはこの解決法がベストだ、とあなたが思う方法ならどんなものでもOKです。さあ始めよう”、などなど。その申し出にたいする患者の体の反応のしかたはとても素晴らしいものだ。相手の体が、あなたに話すようにと伝えてくるまでは一言も交わす必要もないのだ。だが世間話というのは素晴らしく気を散らす役目をするものだ。患者の体が心の防御を越えるのに役立つ、ということをもう一度繰り返して言っておこう。

私が、患者を座らせるか、立たせるかしてソマト・エモーショナル・リリースを始めるようにしてから少なくとも三年がたつ。上に述べたように自分の気持ちを無言のうちに相手に伝えてから手を置く。私のタッチを通したメッセージを、患者の体が自分の中の非意識、または高い知性を持ったもの、あるいは高き自己、(ともかくどんな名前でもよいのだが)に伝達する。それが誠意のこもったもので、相手をおびやかすものでなければ、タッチはあなたと患者の非意識、(もしかして意識も含まれるかもしれないが、ただ最初のうちは意識の気づきのことはあまり気にしないようにしている)の間の信頼のきずなを固める。一度、信頼と気持ちが伝わっても、さらにもう一、二度テストを受けるかもしれないということを考慮に入れよう。この“逃げ回るカモ追い”ゲームは、治療介助者としてのあなたが、真剣にそれを追う気持ちがあるかをテストするためにより活発化するのではないか、と時々思うことさえある。対決するような場面に出会すこともあるが、それは自分が患者の体験プロセスに加わる時に、自分の自我をどこまで制御できるかのカケのようなものだ。

---

15. 心の方向、タッチ、そして内的知恵の概念はこの本の5章で詳しく述べられている。